

17. 地頭町における寺院と生活： 本隆寺の事例をもとに

| | |
|-------|--|
| メタデータ | 言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 深川, 亜希子 メールアドレス: 所属: |
| URL | http://hdl.handle.net/2297/4927 |

17. 地頭町における寺院と生活

一本隆寺の事例をもとに

深川 亜希子

- I. はじめに
- II. 富来町の寺院と門徒
- III. 本隆寺とそこに関わる人々
- IV. 本隆寺の一日
- V. 寺院と高齢者
- VI. 考 察

I. は じ め に

現在、日本人の多くが、宗派は様々にしろどこかの寺院に属しているだろう。では、日本人は1年のうちに何回自分の属する寺院へ足を運ぶのだろうか。この問いに対する答えは地域や世代によっても異なるだろうし、数字の大きさが単純に信仰心の高さを示すというわけでもないだろう。

しかし地頭町で生活する人々は、都市で生活する人々に比べるとかなり多くの回数、寺院へ足を運んでいるように思われる。寺院の年間行事が行われる日はもちろん、それ以外の日にも特に用事がなくても、または用事がないからこそ、人々は寺院という領域に足を踏み入れ雑談をして過ごす。地頭町の人々にとって寺院は「お参りする」場所というよりもむしろ「遊びに行く」場所であるような印象を受けた。地頭町において寺院は日常生活の中に違和感なくすっぽりと埋まっているようにも思える。

その一方で、寺院はやはり非日常的な側面も合わせ持っている。寺院という領域の中でのみ許されるような行為も存在し、それは寺院の日常からの分離を示しているし、人々が寺院によく「遊びに行く」のは日常の一部に非日常を取り入れる行為であるとも受け取ることができる。

このように、寺院とそれを取り巻く人々との関係は複雑である。本稿では地頭町の人々にとって寺院が日常的なものなのか、それとも非日常的なものなのかを結論することを目的とはしない。地頭町の本隆寺の事例をもとに、寺院にやってくる人々、またそれを受け入れる寺院の側それぞれについて記述し、寺院とその周囲に生活する人々との関わり合いを見てゆくことを目的とする。

II. 富来町の寺院と門徒

ここでまず、富来町全体の寺院と寺院、門徒の組織について簡単に説明する。

1. 富来町の寺院とその宗派

『富来町史』によると、富来町全体に寺院は40ヶ寺存在する。そのうちの34ヶ寺は浄土真宗大谷派（東本願寺派）に属し、3ヶ寺は真宗本願寺派に属し、他に浄土宗、真言宗、曹洞宗に属する寺院がそれぞれ1ヶ寺ずつ存在する。

かつて古代から中世にかけて富来地方に存在し、威力を持っていたのは真言宗、曹洞宗、浄土宗の諸寺院であった。しかし蓮如の出現によって浄土真宗が地方農村で発展するようになり、それらの諸寺院は真宗に転宗したり、勢力を失うようになった。代わりに出現した浄土真宗は江戸時代には寺院の組織も完備し、ほぼ現状に近い形態になった。

次にこの地域の圧倒的多数を占める浄土真宗大谷派の組織について述べる。

2. 浄土真宗大谷派の組織

富来町に存在する34ヶ寺は大谷派能登教区第4組に属している。また各寺はそれぞれ門徒を代表する人々からなる独自の委員会を持つ。門徒の女性たちで構成される大谷婦人会という組織や、真宗の行事の1つである講の準備のためのお講組も存在する。以下、順に見てゆく。

(1) 能登教区第4組

先に述べたように富来町に存在する34ヶ寺の連合組織である。この組織は本部を京都の東本願寺におく組織で、地域の寺院を通じての布教を目的とするものである。つまり、東本願寺を頂点とするピラミッド的組織の末端ということになる。

役員の構成は、組長が1名、副組長、教区会議員がそれぞれ2名ずつ、紛争などが起こった時に調査、調停を行う査察が1名である。総会は年に1度1月に開かれる。最も大きな活動は、毎年6月に開催される同朋大会であって1998年6月の大会で13回目の開催となった。1998年の同朋大会には約700名の門徒が集まった。この会の主な目的は浄土真宗大谷派の信仰を深めることであって、毎年講師を招いて講演会を行う。前売り券は1,000円で、会場となる寺の門徒の人々が会場の準備などを受け持つ。

また、1997年は蓮如上人の五百回忌の年であり、富来町からは門徒約200名が5台のバスに分乗して京都の東本願寺へお参りに出かけた。このときのバスの手配なども能登教区第4組の役員が中心となって行った。

能登教区第4組の34ヶ寺はさらに5つの小会に分けられ、それぞれに小会長を持ち、地区ごとの小さな話し合いは小会でなされる。

(2) 各寺院の門徒委員会

各寺院は門徒数にもよるがだいたい10～30名ぐらゐの委員からなる組織を持ち、何かを決議

する時は委員会と門徒総代と呼ばれる委員の代表者4～5名が集まって相談をして、それから委員会にかけて決定する。住職は委員会の相談にはのるが、決議に参加したりはせず、あくまで助言役という立場に徹している。

委員会での決定事項は委員を通じて門徒に伝えられる。

(3) 大谷婦人会

浄土真宗大谷派の門徒の婦人たちで構成されている組織で、能登教区第4組と同様に本部は東本願寺におかれている。この組織は本来は女性への布教を目的としたものであったが、実際には地区の寺院での活動の支えや女性たちの親睦といった役割を果たしている。

富来支部の役員は支部長1名、副支部長、会計、書記がそれぞれ2名ずつであり、任期は2年で4月に交代する。また、支部長には寺院の住職の妻（坊守と呼ばれる）が交替で就くことになっている。現在富来支部の会員数は約300名だという。

主な活動内容は年間行事の際の準備や後片付けなどだが、毎年2月末に行われる総会では、本堂でお経をあげ、決算報告などを済ませた後、親睦をかねてバスで1泊2日の旅行（和倉温泉などの近くの温泉が多い）へ出かける。この旅行には毎回60名くらいが参加するという。

この組織は地区の婦人会とは別の組織であり、最近では脱会者も目立つなど少し不安定な状態にあるという。

(4) お講組

浄土真宗の年間行事の1つに毎月行われるお講というものがある。これについては後に説明するが、このお講の準備のために組まれるのがお講組と呼ばれる組である。

本隆寺においては毎月28日に行われている二十八日講での昼食を準備するために、門徒を地区ごとにグループ分けしてお講組をつくる。本隆寺の二十八日講は3月～7月、9月～10月と年に7回行われ、お講組もそれに合わせて7組存在する。お講組を構成する門徒世帯は当番に当たった月に各世帯からそれぞれ1名ずつ手伝いを出す。それはほぼ例外なく世帯主の妻かその息子の嫁である。

このお講組も大谷婦人会や地区の婦人会とは別のものであるが寺院との関わりは深い。お講組の二十八日講での活動の様子については後に記述する。

3. 地頭町とその周辺の寺院

地頭町とその周辺には6つの寺院が存在し、地頭町の人々のほとんどはその6つの寺院のどれかに属しているという。

その6寺とは、地頭町の本光寺、本隆寺、領家町の恵光寺、西光寺、徳照寺、高田の以覚寺である。このうち西光寺は浄土宗、残りの5寺は浄土真宗大谷派に属する。

ここで注意しておかなければならないことは、地頭町に住む人のすべてが先に挙げた6寺のいずれかに属しているのではないということである。またその逆に、地頭町の2つの寺院の門

徒はすべて地頭町の住民であるわけでもない。寺院は地域を越えたつながりを持っていて、この点が地元の氏神を祭る神社とは異なっている。特に『富来町史』の記述によると、富来地方の寺院は寺のある地元に多くの門徒を持っているが、門徒の分布は入り組んでいて、富来町に存在する寺院が町外に門徒を有することが、町外の寺院が富来町に門徒を有する数よりも多いという。このように、地域を超えて人々を関係づけるという側面も念頭に置いて、地頭町の寺院と住民の関わり合いを考えてゆく必要がある。

Ⅲ. 本隆寺とそこに関わる人々

寺院にやってくる人々はどのような目的でやってくるのか。そしてどのような世代や性別の人が多いのだろうか。ここでは本隆寺において寺の年間行事にやってくる人々、行事以外の普通の日に来る人々、葬儀、法事などにやってくる人々それぞれについて述べる。

その前に本稿で事例として取り上げる本隆寺について少し触れておこう。

本隆寺は地頭町建部神社横の石段を登った上に位置し、伝承によると南北朝時代に南朝の忠臣が戦に敗れて出家し、真言宗に帰依したのを開基としている。その約240年後に10代目住職源忠が浄土真宗に転派し、現在の住職まで21代、約400年経っている。その間2度地頭町を襲った大火災においては過去帳などの大切な品物は焼失を免れた。現在の住職は、60歳代、穴水町の出身で、夫人は志雄町出身と、住職夫妻は元々地頭町で生まれ育ってはいない。

現在、門徒数は約120戸で、その7割が地頭町の住民であり、特に商店経営者が多いという。その他の門徒は領家町、高田、七海、相神、尊保などに分布している。

以上がこれから取り上げる本隆寺の簡単な紹介である。次に具体的事例に移る。

1. 年間行事とその参加者

本隆寺で行われる主な年間行事は、元旦に行われる修正会、3月1日から10日の祠堂経、7月3日から10日の別経、11月21日から28日の報恩講、3月から7月と9月、10月の各月の28日に行われる二十八日講がある。

元旦に行われる修正会は元旦会ともいい、新年を祝うとともに先祖への感謝の気持ちを込めて念仏を唱え、その年の新しい決意や希望を心に刻むものである。

祠堂経は門徒の先祖の供養のためにお経をあげるもので、別経は浄土真宗の宗祖である親鸞聖人に対してお経をあげるものである。どちらも寺院で行われ、その際に門徒はお布施を持参する。

報恩講は浄土真宗の年間行事の中で最も重要視されている行事である。報恩講は親鸞聖人を偲び、報恩の思いや感謝の心をあらわし、念仏を唱えることを目的として行われる。本隆寺の属する大谷派では11月21日から聖人の祥月命日である28日までの毎日（合計7晩）行われるの

でお七夜とも呼ばれている。

二十八日講は親鸞聖人の命日28日に門徒が道場に集まって法話を聞き、信心を確かめ合う集会を持つようになったことが始まりとされる。二十八日講は、法話を聞いたあとで住職をかこんで信心を確かめ合い、共に食事をするという、門徒にとってはとても親しみ深い行事となっている。なお、寺によっては仕事を持つ門徒が参加しやすいようにと、28日ではなく日曜日に行う場合もある。

これらの行事に参加する人々の顔ぶれはだいたい同じで、平日に行われる行事は高齢者や女性の比率が高く、報恩講などの大きな行事や休日に当たった行事には、普段仕事を持つ男性もこれに加わり人数も増える。しかし全体的にはやはり高齢者や女性が中心的で、20歳代や30歳代の若者の姿はあまり見られないという。

2. 本隆寺の二十八日講

ここで、年間行事の1つの事例として、1998年10月28日に私自身が実際に見学した二十八日講の様子を記す。

10月28日の朝8時頃から、この日の二十八日講のお講組の女性たちが本隆寺に集まる。それぞれが前日までに買ったり下ごしらえしたりしておいた材料を本隆寺の広い台所へ次々と持ち込む。この日のお講組のメンバーは7名。お講組は地区ごとに組まれるようになっているのでメンバーはお互いに近所でよく知り合っているらしく会話はずんでいいる。精進料理なので肉や魚などは使わないが、メニューの中にはポテトサラダといった洋風のものから、昔ながらの野菜の煮物まで、多様な品々がおかれている。この日のメニューは10月22日にお講組のメンバーが集まって決定して、材料の分担もそのときに行った。今回は30人分のお膳（食事）を用意した。材料費はお講組の女性たちが負担し、お講にやってきた人たちから300円ずつ支払ってもらう。料理の最中の女性たちの会話は途切れることなく続き、その話題は味付けの話から子供の話や旅行の話など多岐にわたっている。料理の最終的な味付けは、全員で味見をして決めているのも印象的だった。ある女性は「毎回料理の勉強になるから楽しみにしているのよ」と言って微笑んだ。

住職夫人は別室で仕事をしていて、途中何度か様子を見に来る程度だった。報恩講では全行程を夫人が仕切るのに対し、二十八日講はお講組に「すべておまかせしている」のだそうだ。

10時半頃に夫人が本堂脇の鐘をつき始める。これはその日にお講が行われることを示す合図である。本隆寺は地頭町の住宅を見おろすような位置にあり、鐘がよく聞こえるすぐそばの家並みは太鼓下と呼ばれることもある。私自身も地頭町の人が「太鼓下のあたり」などと言うのを何度か耳にした。それほどこの鐘の合図は住民にはなじみのものとなっているのかも知れない。

11時頃から本堂に人が集まり始める。ほとんどが高齢の女性でお互いに楽しそうに会話を交

わしていた。彼女たちの会話は別棟で雑談をしていた住職と数人の男性参加者が本堂へ入ってきたからも、しばらく続いていた。

住職のおつとめ（お経をあげる）と法話はだいたい1時間ぐらいだったが、その途中に入ってきて、先にきていた人全員に挨拶をする女性がいたり、たまたま連れられてきていた幼児が騒いだりと、その場の雰囲気は非常にリラックスしたものだ。そして法話が終わると別棟で全員がお膳につく。お講組の女性たちは、おつとめと法話が行われている間にお膳の準備をする。そして参加者全員が食事を終えてその後片付けが済んでから住職夫人と一緒に食事を取り、午後の4時頃まで寺で過ごす。一方、食事を済ませた参加者たちは、早々と帰る人もいれば残って住職と知り合いとの会話を楽しむ人もいて様々である。しかし午後3時頃にはお講組の女性たちを除くすべての参加者が家へと帰っていった。

この日の二十八日講に集まったのは住職夫妻とお講組の7名の他に20名で、そのうちの15名が女性であった。祖母に連れられてきていた幼児2名を除くとほぼ全員が50歳代以上の人々のようだった。住職によると、この日の参加者の人数は通常よりも多く、おそらく天気が良かったことが理由だろうという。しかし逆に天気が良いと畑仕事に手を出す人が多くなり、参加人数が少なくなることもあるという。いずれにせよ集まった人々のほとんどが、「家にいてもすることがないから」とか「暇だったから」といった理由で、気軽に二十八日講に参加しているようだった。

以上が10月28日に本隆寺に行われた二十八日講の様子であるが、次に寺での行事への参加とは別に個人が寺にやってくる場合について述べる。

3. 行事のない普通の日

本隆寺では毎日来客が絶えないという。そのほとんどが行事の参加者と同様に年輩の人々である。

かつては若い女性の来訪もかなりあったという。寺へやってきて姑の悪口を他の若い嫁たちと言いつつは帰っていったという。その逆に姑たちが嫁の悪口を言い合うこともあった。「寺にゆく」ということは、少し大げさな言い方をすれば、日常からの逃避を意味していた。寺という非日常的で特別な領域に足を踏み入れれば、そこではいつもは言うてはいけないようなことを言ったりすることが許されると思われていた。寺の中でのみ許されるといった暗黙のルールが人々の内に存在した。また、寺は他人の悪口を言うためだけではなく、親しい人との会話を楽しむ場所でもあった。そして「寺にゆく」ということはその目的が何であれ、外出の口実、自分の行為の正当化の役割を果たしていた。

現在では他人の悪口などを言い合うためにやってくる人は少なく、住職への人生相談などが来訪者の主な目的となっているようだ。やってくる人はだいたいいつも決まった人であるというが、その人たちにとって寺は気軽に訪れることのできる場所のようだ。また来訪者は門徒で

あることが多いが、そうでないこともあり、基本的には誰もが自由に出入りできる。

4. 葬儀、法事

地頭町での葬儀、法事はかつてはほとんどが個人の家で行われていたが、最近は住宅事情などにより寺院で行われることが増えたという。特に本隆寺の門徒は商店経営者が多く、場所が不足するので門徒の7割くらいは本隆寺で葬儀を行うという。寺院で葬儀が行われる際には当然人々は寺院に集まる。

地頭町における葬儀の詳細をここで述べるつもりはないが、注目すべき特徴としては、死者の出た家が属する班で葬式が取り仕切られるという点が挙げられる。班長の指揮のもとに班の成員は平均して2日ほど仕事を休んで手伝いをする。葬儀の会場となる寺には食器や調理具も備えられていて、女性たちは主に料理の準備をし、男性たちは式場の準備や受付などを手伝う。

葬儀の際に寺院にやってくる人々は、大きく分けて参列者と手伝いということになるが、参列者はもちろん手伝いの人も、全員がその寺院の門徒というわけではない。特に手伝いは班を単位として出てきているので、多少強制的な意味も持っている。地頭町では葬儀の際に班の成員が手伝うのは当然とされているようなので、葬儀時の手伝いに寺院へ集まる人々と年間行事やその他の日に進んでやってくる人々とは区別して考えるべきであり、本稿では自発的に寺院にやってくる人々について触れたい。

また、法事についても同様に義務的な側面が見られるが、法事は葬儀に比べると集まる人数も少なくなるために寺院よりも個人の家で行われることが多く、その際に手伝いも最近はあまり重視されず、料理は仕出屋に注文することが多いという。したがって法事で寺院へ行くということはあまりない。

IV. 本隆寺の一日

住職は毎朝7時頃に起きて、水撒きをしてから朝のおつとめを行う。おつとめは朝夕の1日2回行い、灯明（ロウソク）をともし、線香をあげてお経を唱える。朝にはお仏飯をあげる。そして日中は来客の悩み事を聞いたり人生相談をしたりする。門徒の家にお経をあげに行くこともある。夕方にはお退事といって、毎月故人の命日にお経をあげにゆくという仕事が入る。これは、ある人が亡くなってから50年間続けるものなので、ほぼ毎日門徒の誰かの所へ行くことになるという。その他に特別な場合として法事や葬儀が入ることがある。また、PTAや公民館の活動への助言や家庭裁判所の調停員なども務めていて、毎日かなり忙しい。

夫人の主な仕事は家事全般だが、手伝いを雇ってはいないので毎日掃除をするだけで時間が過ぎてしまうという。掃除の他にも食事の準備や来客へのお茶だしや電話の対応など、住職と同様に忙しい。10月28日のお講の前日には寺の周辺の落ち葉を住職と2人で1日かけて片付け

たという。

このように住職と夫人は毎日多忙ではあるが、「やってくる人は誰であれ歓迎する」という。そして常に誰もが気軽に入ってこれるように心を配っている。そのような心構えが多くの人々を本隆寺へ向かわせる原因になっている気がしてならない。

V. 寺院と高齢者

寺院への来訪者のほとんどは、退職した高齢者や家庭の主婦などで、だいたい毎日を地頭町の中から出ずに過ごしている人々である。特に平日は男性たちは仕事に出たり、自分の商店を開いたりし、子供たちは学校へ行くので来訪する時間があるのは主婦や仕事を持たない高齢者に限られてくる。しかし時間があるからという理由以外に寺院は人々、特に高齢者を惹きつける要素を持っている。

Ⅲでも述べたように、寺院はかつては親しい友人と雑談を楽しむ場であった。そしてそれは今も続いている。その様子はお講の日に人々が楽しそうに会話している様子からもうかがえる。寺院は一種の社交場なのである。そして社交の場としての寺院の役割は特に高齢者にとって重要となってきている。

現在、日本の農村部では過疎化、高齢化が大きな社会問題となっているが、地頭町もその例外ではない。高齢者人口の増加を反映してか、地頭町では高齢者を対象とした数々のレクリエーションのサークルが増加し、それらはかなり活発に活動している。ただしこれらのサークルは活動日を決めて活動しているために、気が向いたときに必ず行えるというわけではない。それに対して寺院という存在は消えたりせず常に存在するので気が向いたときに足を運ぶことができるし、それを迎える寺院の側もⅣで述べたように誰でも歓迎するという姿勢なので行きにくいということもあまりないだろう。寺院に行けばたまたま知り合いに会うかも知れないし、会わなくても住職に話を聞いてもらったりもできる。サークルなどの娯楽とは異なるが寺院に行くことも気晴らしの方法の1つとなっている。このように高齢化社会において、寺院は社交の場を提供すると同時に、サークル活動などだけでは補うことが困難な精神面の支えを行っているといえる。つまり地頭町で生活する高齢者にとって、サークルも寺院もどちらも重要な居場所なのである。

VI. 考 察

これまで述べてきたように、地頭町で生活する人々、特に仕事を持たない女性や高齢者は都市の住民に比べてかなり多くの回数寺院に出向く。しかもそれは葬儀や法事を別として義務で

あるというよりも楽しみや暇つぶしのためといった理由であることが多い。冒頭でも述べたように、地頭町の人々にとって寺院は「お参りする」場所というよりは「遊びに行く」または「気晴らしに行く」場所という意味が強い。彼らにとって寺院の存在は身近で親しみやすいものだろう。ここでいう彼らとは、地頭町の住民の中でも女性や高齢者を主に指すことになるが、それ以外の住民も自らは寺院に行かないにせよ、人々が頻繁に寺院を訪れているという事実は知っているだろう。

都市で生活する人々に比べると、地頭町の人々は寺院を日常的な存在とみなしている。だからといってここですぐに都市の人々にとって寺院は非日常的で地頭町の人々にとっては日常的な存在であると断言するつもりはない。このことについては前にも述べた。また地頭町の人々にとって寺院が全く日常的なものかということそうではない。寺院とは地頭町の人々にとってもやはり特別な存在である。ただし、その寺院との関わり合い方が、都市で生活する人々と地頭町で生活する人々では異なっている。都市の人々にとって寺院は生活の外部に位置し、地頭町の人々にとってのそれは生活の内部に位置し、どちらにとっても特別な存在であることに変わりはない。ただそれが最初から外部に位置しているものとしてみるか内部にあるものとして見るかによって印象は異なり、それを身近に感じるか否かも異なる。地頭町の人々にとって寺院は生活の内部にあってやすらぎを与えてくれる場である。そのやすらぎとは友人との雑談であれ住職との人生相談であれ、日常生活からはある程度距離を置いたものである。生活の内部にあるので身近だが日常とは異なる空間、それが地頭町の人々と本隆寺との関わり合いを見ていて得た印象である。

一方、誰でも気軽に訪れることができるという本隆寺の雰囲気をつくっている要素として、住職夫妻の細やかな気配りも見逃すことはできない。IVでも述べたように、住職夫妻は毎日寺の周囲に気を配り人々が寺院へ入ってきやすいように心がけている。また「強制をしない」ことが基本で、毎月の二十八日講の日程についても門徒と話し合いをして決めた。人々は寺院に来たいときに来て帰りたいときに帰ることがほとんどである。

以上、地頭町の住民とその中に位置する本隆寺との関わり合いについて述べてきたが、この関わり合いは地頭町の現在の状況やそれが抱えている問題を反映している。

高齢化の進む社会の中で、寺院は高齢者に憩いの場を提供し、高齢者の側もそれをかなり積極的に利用している。現在地頭町に住む高齢者は地頭町やその近辺部で生まれ育った人がほとんどで、長い間地頭町で生活してきた人たちである。彼らの多くは寺院の年間行事などにも長い間参加し続けていて寺院へ行くことに慣れているし、お互いによく知り合っている。そして憩いの場としての寺院も家のすぐ近くに存在する。こうした理由から地頭町に住む健康な高齢者が自分の居場所を見つけるのは、都市に住む高齢者よりは簡単だろう。なぜなら都市に住む高齢者は昔からの知り合いが近所に多く集まっていることは少なく、新しい友人や居場所を得

るためには本人や周囲の人が意欲的にサークルなどの出会いの場を探し、活動に参加していかなければならない。地頭町の寺院のあり方は、都市の居住状況の中ではほとんど不可能であるという良いだろう。地頭町において寺院が憩いの場となり得ているのは、地頭町の現在の居住状況によるものが大きいだろう。

また、かつて現在に比べるとはるかに嫁の生活が過酷だった頃には、若い嫁たちの出入りが多かったなどと、その時代ごとの社会状況によっても寺院にやってくる人々の目的、年齢、性別は左右される。そして現在の地頭町の高齢者と寺院との関わり合いは、彼らが若い頃から長い年月をかけて培ってきたものである。現在の若い世代がかつてに比べ寺院に足を運ばなくなっていることは、日中には地頭町の外に働きに出かける人が多くなったということや、ライフスタイルそのものの変化が主な要因であろうが、それは今後の寺院と人々の関わりの変化をも暗示している。

いずれにせよ、現時点では地頭町の住民にとって寺院は都市の住民に比べて身近な存在であるということはいえるだろう。人々が気軽に寺院へ出かけ、寺院でもそれを温かく迎えている様子が非常に印象的であった。そして寺院と住民の関係は地頭町の社会的状況や住民の意識、寺院の側の行為などが互いに影響し合っ変化してきたものであり、単純に信仰が厚いから寺院へよくお参りするのだと決めつけるべきではない。今後地頭町の住民と寺院との関わり合いがどのようなようになってゆくかは、地頭町全体の社会状況に依存している。